

南三陸町 次期総合計画 基本構想骨子案

南三陸町

平成 27 年 8 月

目次

第1章 南三陸町のまちづくりが目指すこと	1
1 まちの将来像	1
2 まちづくりの視点	4
第2章 人口・経済等の見通しと目標（作成中）	
1 将来人口（作成中）	
2 産業経済（作成中）	
第3章 土地利用のあり方	7
1 町の基本構造	7
2 土地利用の方向性	8
第4章 施策の大綱（作成中）	

第1章 南三陸町のまちづくりが目指すこと

本町では、平成23（2011）年3月11日に発生した東日本大震災により、壊滅的な被害を受けました。震災後には、復旧・復興の早期実現のために、その指針となる「南三陸町震災復興計画」を策定し、これに基づき計画的に復興まちづくりに取組むことで、新たな生活基盤の整備が着実に進められています。

本構想は、これまでの復興の歩みをさらに進展させ、復興のその先を見据えた本町のまちづくりの指針です。わが国が迎える未曾有の人口減少および少子・高齢化社会の中においても、町民それが地域の一員としての責任感を持つとともに、この自然豊かで命がめぐる南三陸町の地で、生きがいを持ち暮らし続けるために、町内外の人たちと連携し歩み続けるための“道しるべ”となるものです。

1 まちの将来像

これまで本町が目指してきたまちの将来像を踏まえるとともに、震災による“気づき”をもとに発展させ、これから本町が目指すまちの将来像を次のように定めます。

● 平成27年度作業部会案1

森 里 海 ひと いのちがめぐるまち 南三陸

提案の背景：

森があり、里があり、海があり、そこに人が生かされているという「自然への尊敬の念」を皆の共通の意識として持ちたいと思い、最初に自然（森・里・海）を並べた。

また、『ひと』という表現は、子どもからお年寄りまで色々なひとが生きているということを表している。

『いのちめぐるまち』という表現は、震災で亡くなつた方、人が住まうために切られていく木、埋められていく川などがめぐって新しい命になり、また帰つてくるという希望をみんなで描きたいという思いを込めている。

● 平成 27 年度作業部会案2

人と自然がバトンをつなぐまち 南三陸

提案の背景:

命の大切さ、人ととのつながり、大地の恵み、お世話になった人の愛、これまで歩んできた歴史などの思いを込めている。

● 平成 27 年度作業部会案3

みんなで創ろう南三陸 海・山・里 人の命がめぐるつながりのまち

提案の背景:

後半部分は、前回の H26 年度作業部会案1(「みんなで暮らす、ちょうどよいなか ～海・山・里・人の命がめぐる つながりのまちをはじめよう～」)をそのまま活かしている。

『みんなで創ろう南三陸』という表現は、震災で培った絆、色々なつながりを大切にし、町内だけでなく全世界へ向けてみんなでつくっていくという意味で、町の名前も加えて作成した。

※審議会にて将来像案が絞り込まれた後に、解説を追加します。

■ 平成 37 年度における年代別の生活像

南三陸町の高齢者の人々は、地域の中で積極的に暮らしを楽しむ力を持って生活しています。ひとりのときも仲間と一緒にいたりと時間の流れを楽しむとともに、またスポーツや文化活動および地域貢献をしながら、それが個性豊かに毎日元気に暮らしています。

中高年層の人々は、水産業をはじめとしてそれが生きがいを感じる仕事をしながら、町内外の人々とのつながりを築いています。休日には、自分の趣味を広げたり、地域の活動に積極的に関わるとともに、また地域の情報や自らの価値情報を発信しています。

若い世代の人々は、学校教育や地域のお祭り・文化などを通じてまちの魅力や宿命を学ぶことで、“ふるさと意識”と“次世代を担う责任感”を強く持ち、地域の担い手として活躍しています。進学や就職でいったんは町外へ出て行った人も、自分の特技・力を活かし将来は再び生まれ育ったふるさとの地で自分らしく暮らすことを想っています。

子どもたちは、地域社会の一員として、お祭り・イベントなどを通じ世代を超えたつながりの中で暮らしています。“未来の大人”として、未来を感じ語ることのできる豊かさとともに育っています。

そして、南三陸町には、ボランティアやNPO等震災がきっかけで交流が始まった人々、震災の教訓や地域資源を学びに来る人々、海・山・里の恵みを求めて来る人々、南三陸町のファンとして地域の人々のおもてなしを求めて来る人々、ビジネスで来る人々など町外から多くの人々が訪れてきます。その中で、日々常に新しい“絆”が生まれ、人々はそれを大切に育んでいます。

2 まちづくりの視点

まちの将来像を実現するために、歴史・文化・自然など本町の成り立ちや魅力、宿命を理解するとともに、町内外の人と人、各産業間の人と人、地域の中の人と人、すべての“絆”を大切に、次の4つの視点からまちづくりに取組みます。

○ 地域文化の学習（伝承・防災・循環）

まちを知ることが“交流”であり、まちを伝え合うことで“コミュニティ”が形成されます。町民が地域文化を学び語り続けるまちとなり、新たに入って来る人たちも、元々住んでいる人たちもすべての町民が、“まちの記憶”を共有することで、地域の一体感を育んでいくことが大切です。また、まちの記憶はこのまちに生きた人たちが歴史の中で培ってきた教訓でもあり、これを知ることで子どもたちをはじめすべての町民は、このまちで生き抜く防災力を身につけることができます。

地域文化が次の世代へと語り継がれ、命とともに記憶が循環し続けるまちづくりに取組んでいきます。

○ 多様なコミュニティの再構築（つながり・人づくり）

“近所付き合い”こそがコミュニティの根幹であることを理解し、改めて縁側文化を大切に、世代を超えて交流し、お互いが助け合い支え合うまちづくりに取組んでいきます。

お祭りや地域のイベントを通じて世代を超えた交流を生み、そのような付き合いの中で、子どもたちが地域の一員としての自覚を形成していくことが重要です。

また、復興によって再構築されるコミュニティと、同時に震災以前から続くコミュニティの双方を大切にし、重層的につながりを広げていくことが求められます。南三陸町全体が一つの地域コミュニティでもあることを認識し、町内全体の情報共有と連携を行い、一体感あるコミュニティの形成に取組んでいきます。

○ 交流・定住人口の増加（感謝・おもてなし・ふるさと意識）

これまでの多大な支援に対する感謝の気持ちと、“おもてなし”的心を持って、町外のすべての人たちを迎えることが大切です。全国・全世界の人たちに南三陸町の“人”を好きになってもらい、大勢の南三陸町ファンをつくることを目指していきます。

また、町外から帰ってくる人たちも、町内への移住を希望する人たちも、南三陸町に暮らしたいすべての人たちを積極的に迎えることが重要です。地域が子どもを育て高齢者を支えるような、家族が安心して暮らせる環境を築くとともに、いったん町外に出て行った人たちがいつかは必ず帰ってきたいと思えるふるさとであることを目指していきます。

地域のブランド価値を高めていくとともに、町内外の様々な人たちが行き交い、多くの人たちが移り住む、活気あふれるまちづくりに取組んでいきます。

○ 産業のブランド化（仕事・雇用・連携）

世界に知れ渡った「南三陸町」の名前を活かし、町外に積極的に発信することが大切です。おもてなしの精神あふれる人や地域の魅力を土台としつつ、南三陸町のあらゆる産業が密接に連携をとることによって、魅力的な6次産業の形成や、産業間連携による革新を目指していきます。

また、地元の中小企業をはじめ、地域資源を活かした地場の各産業が「南三陸町」という明確なブランドのもとに、一貫性を持って一層の魅力向上に取組み、本町の産業を牽引することを目指していきます。



それぞれの視点が上下関係なく、“紡ぎ”によって形成されていく様をイメージしています。

第3章 土地利用のあり方

1 町の基本構造

※各ゾーン・軸・交流結節点等の名称はいずれも仮称です。

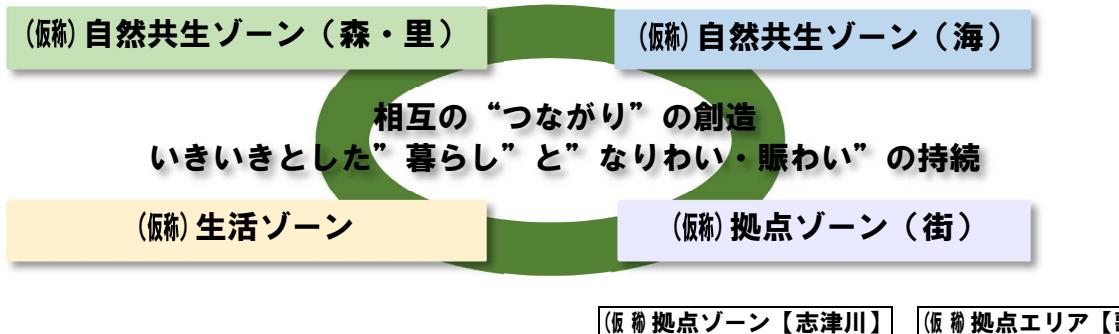
檢討・調整中

生活ゾーンをはじめ、各ゾーンの区域は現在、検討・調整中です。今後、変更することがあります。



ゾーン 森・里・街・海のつながりが育む「暮らし」「なりわい」「賑わい」

分水嶺に囲まれた森・里と川、海がつくりだす恵み豊かな環境を守るとともに、資源循環による産業振興や雇用の創出、新たな交流・体験や地域のブランド化などを誘発する相互の“つながり”を創造し、いきいきとした“暮らし”と“なりわい・賑わい”を持続させていきます。



軸 交流と連携
〔(仮称)広域交流軸〕〔インターチェンジ・(仮称)交流結節点〕〔(仮称)地域連携・回遊軸〕

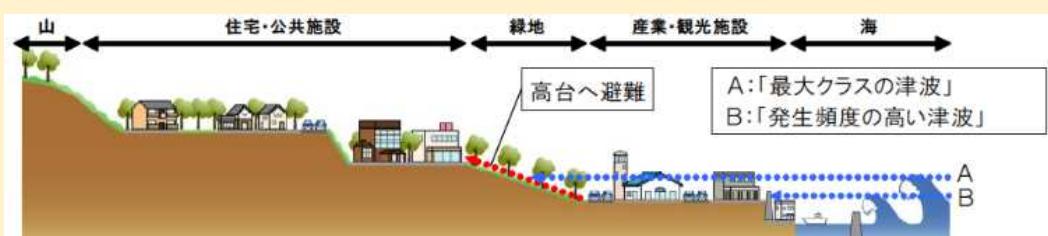
2 土地利用の方向性

基本原則

「なりわいの場所は様々であっても、住まいは高台に」

本町では、東日本大震災の教訓を踏まえて、どのような災害に遭遇しても命が守られ、将来にわたって安全で安心して暮らし続けることができる町、集落及び地域社会を創造します。

そのため、住宅や公共施設を高台など安全性の高い場所に配置し、住まいやなりわいの場の近くに安全な避難場所・避難路を確保していきます。



基本方針①

居住地と公共施設の高台配置を基本とした土地利用

基本方針②

なりわいと賑わいが持続する土地利用

基本方針③

生活・回遊の交通ネットワークで連携が進む土地利用